

# 映画で 中国を 愛せるか

◎ひとつの日中文化交流の試み



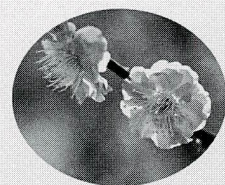
玉腰辰己  
たまこし・たつみ

◎ 笹川平和財団研究員、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員。

◆ 1966年生まれ。日本大学芸術学部卒業後、西武百貨店、ギャガコミュニケーションズ勤務ののち、上海、台北、シンガポールなどの遊学を経て、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士課程修了。2008年から現職。

[専門] 国際文化交流。

[著書] 『日中関係史 社会文化編』(共著、東京大学出版会、2012年)、『証言 日中映画興亡史』(共著、蒼蒼社、2013年)など。



日本人の中国人に対する感情は、いま冷えきっている。そうした時代に、わたしたちにいったいながでさるのだろう。たとえば映画でならどうだろう。映画によって冷えきった感情を暖めることはできないだろ

うか。そうした思いをもって筆者がこの三年間、所属している笹川平和財団の仕事で行なってきた「映画で中国を愛せるか?」という活動についてレポートしたい。

二〇一〇年九月、尖閣諸島近海で違法操業していた中国漁船の船長が海上保安庁に逮捕された。一〇月に実施された内閣府の世論調査では、中国に「親しみを感じない」日本人の比率は七八%に達した。一月には漁船が海上保安庁の船に体当たりを繰り返す衝撃的な映像が公開された。

二〇一二年には、石原慎太郎東京都知事が島を守るためには東京都が購入すべきだと寄付金集めを始め、日本政府はその動きを封じようと九月に国有化を決定した。

ところが、それはかえって中国政府と世論を刺激した。中国政府は国内外で日本批判を展開した。中国国内では大規模な反日暴動が発生し、暴徒たちが日系店舗を略奪放火し、その映像が日本国内で報道された。そしてこのとき、中国に「親しみを感じない」日本人の比率はついに八〇%を超えた。

振り返ってみると、日本人はそれまでも攻撃的・暴力的な中国人を見るたびに中国に対して好意を失ってきた。

一九八九年の天安門事件でデモ鎮圧を見た年、中国に「親しみを感じない」日本人は四〇%を超えた。

二〇〇四年夏に中国で行なわれたサッカーのアジアカップでは、スタジアム全体が反日のムードに包まれ、公使の車が群衆に取り囲まれ、ガラスが割られ、「親しみを感じない」日本人が五〇%を超えた。

北京オリンピックのあった二〇〇八年には、四月に長野で聖火リレーが行なわれた際、それを妨害しようとするチベット人権派からリレーを守ろうと中国人四〇〇〇人が集まり、巨大な中国国旗を何本も威圧的に振りかざした。ソウルオリンピック(一九八八年)のときには日本人の韓国人への親近感は一転した、



北京オリンピックのときには逆に日本人の中国観は悪化した。

このほかにも、中国人留学生による福岡一家四人惨殺事件、大分恩人殺人事件、毒ギョーザ事件、人民解放軍艦のレーダー照射事件などもあった。

そのどれもが身震いするような恐ろしい事件である。しかし、そのほとんどで中国側の官製報道はわたしたちが見ている報道とは異なる立場に立つ。だから、こうした事件のたびに日本人が心寒い思いを重ねてきていることなど、中国人はおそらく察しつかない。

つまり、中国人の知らないところで、中国人を見る日本人の心は冷めてしまっている。中国に対して熱く抗議の声を張りあげる日本人はそれほど多くないかもしれない。しかしその陰で、日本人は静かに、中国や中国人に対して冷たい気持ちを持ってしまっている。それが世論調査の結果に表れている。

こうした状況で、わたしたちはいったいなにをすべきだろうか。冷めてしまった中国への関心を暖めるには、どうしたらよいのだろうか。たとえば、映画の力を使って、なにかできるのではないだろうか。

これが、「映画で中国を愛せるか」プロジェクトの問題意識である。

以下に、具体的になにをしたか、その経緯などをご紹介したい。

### Ⅰ『山の郵便配達』の フォ・ジェンチー(霍建起)監督 招へい

二〇一〇年の秋から冬にかけて、当時、漁船衝突に端を発する日本人の中国観の悪化はきわめて深刻なものに見えた。そこで、もう一方にバランスがとれる

ような文化交流ができないかと考え始めた。かつて二〇〇四年ごろ、日韓関係で竹島問題があっても「韓流」ブームでバランスがとれていたことを思い出し、映画によってなにかができるのではないかと考えた。

北京に行き『人民中国』誌の編集長である王衆一氏に相談をもちかけた。『人民中国』誌は中国文化部が発行している日本語の雑誌で、日中両国の文化事情を紹介している。王衆一氏は日本映画にも知悉しており論文や翻訳書もある。日中間の関係改善のために映画でなにかできないかともちかけたところ、「ぜひやりましょう」と強く賛同していただいた。相談を繰り返した結果、中国の映画監督を日本に連れて行き、交流会をする案が生まれた。そして王氏がフォ・ジェンチー(霍建起)監督

を選び、日本に呼ぶ手はずを整えてくださった。フォ監督の『山の郵便配達』は岩波ホールでロングラン上映を記録した、日本でも人気のある作品である。



広島映画館・八丁座でのフォ・ジェンチー監督と市民の交流会。2011年10月2日。



フォ監督には、将来日本で映画を撮りたくなる地域を案内することにした。監督のそれまでの作品はいずれもロケ地が美しく撮られている。もし日本を舞台に映画を作れば、きっと中国人がロケ地に訪れる。かつてフォン・シャオガン（馮小剛）監督の『狙った恋の落とし方。』が中国で北海道観光ブームを巻き起こした例がある。そこで今回は、中国人にはあまり知られていないが旅情ゆたかな地域ということで瀬戸内海周辺を選んだ。監督に広島、愛媛を案内し、それらの街で交流会を実施することにし、準備を進めた。

二〇一一年秋、監督を北京から一週間招き、広島市内で映画館「八丁座」のご協力を得て『山の郵便配達』の上映と交流会を催した。さらに愛媛・松山市では愛媛コミュニケーションビジネス専門学校と、いよコロザシ大学のみなさんのご協力を得て『台北に舞う雪』の上映会と交流会を催した。

これらの交流会を含む周遊の全行程のアレンジを「フィルムコミッション」にお世話になった。フィルムコミッションとは、映画やドラマなどの撮影誘致や現地での撮影をサポートする機構で、実際には地方自治体の観光担当の部署が担っていることが多い。今回のケースでは、フィルムコミッションの全国組織である東京の「ジャパン・フィルムコミッション」が連絡調整をしてくださり、広島、愛媛の各フィルムコミッションが現地のアレンジをしてくださった。

それら各フィルムコミッションには、フォ監督に将来日本で映画を撮ってほしいという目的があった。また、日本の地方自治体には中国と経済関係を太くするため交流に積極的なところが多く、中国との交流機会づくりに前向きであった。また、ご担当のみなさんは、映画で国際交流する意義を高く認めていらつしやる方

が多かった。

広島と愛媛の交流会は盛会に終わった。それだけでなく、監督を連れて歩いた先々でも握手や記念撮影を求める熱心なファンの方々に出会った。『山の郵便配達』の監督だということだけで顔色を変えて喜ぶ人たちがこれほど多いとは、正直なところ意外でもあった。フォ監督も喜び、感謝の気持ちを述べて気持ちよく帰国された。

この出会いの中で、世論調査の示すデータには表れない、中国との文化交流を望む人々が各地にいるということを目の当たりにできた。

## 2▼ジャジャンクー（賈樟柯）監督の招へい失敗

フォ・ジェンチー監督招へいが成功だったため、翌年も、王衆一氏と同様の計画を立てた。今度はジャ・



愛媛コミュニケーションビジネス専門学校でのフォ監督との交流会。2011年10月5日。

ジャンクー（賈樟柯）監督を選び、福岡、北九州、山口、広島を回る予定を立てた。この時も各地のフィルムコミッションのみなさんが熱心に準備を進めてくださった。

ところが二〇一二年一〇月、実施直前のどたんばで、当のジャ・ジャンクー監督から「日本に行けない」と



の知らせが入った。

理由は、中国で反日暴動があったばかりで、監督自身、日本行きがためらわれるからだという。これはショックであった。独立系で国際的に名をあげた監督なので、政治の時流にかかわらず日本に来てくれるだろうと期待していたからである。

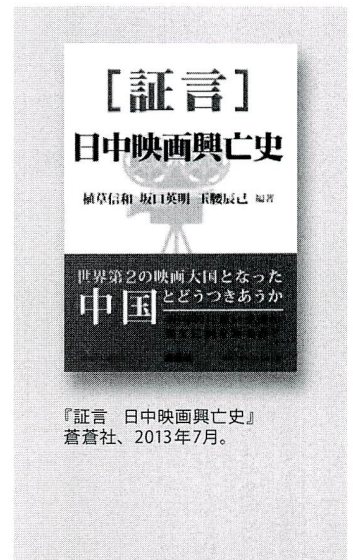
しかし、思えば映画人は人気商売である。たとえば、かつて二〇〇一年に香港の人気女優ヴィッキー・チャオが日本の旭日旗の柄のドレスを着て雑誌に載り、しばらく仕事を干された事件があった。人気商売の彼らにとって同胞の反日感情を軽視することは命取りである。そうした事情は納得できる。

要するに、反日世論を気にして日本に來なかつた中国側と、その交流を熱心に準備していてドタキャンされた日本側という構図だった。この構図は、日中国交回復四〇周年にあたるこの二〇一二年に、おそらくあちこちで発生したことだと思う。

結果的に招へいは失敗に終わったものの、東京、福岡、北九州、山口、広島の実ルムコミッションの方たちの積極的な協力姿勢は強く印象に残った。ほかの映画祭の準備と仕事が多忙になっていたにもかかわらず、緊密な連絡を絶やさず、周到にいいいな事前準備をしてくださった。その熱意には、世論調査に表れているような「嫌中」感情はまったく見られなかった。

### 3▼書籍『証言 日中映画興亡史』の試み

二〇一二年の暮れ、本来であればフォ・ジェンチー監督とジャ・ジャンクー監督の招へいの結果を財団にレポートし、翌年からの映画による文化交流事業を立



案するつもりでいた。

しかし、この年、状況はそれを進めにくいものになっていた。尖閣諸島問題が原因でこのほかにも交流事業がいくつもキャンセルされていたのである。

日本側には政府間関係が冷え込んだときこそ民間のパイプを絶やしてはいけないという発想がある。しかし、中国側はそういう時に政府と同調してキャンセルすることが多い。「こういう時期だからこそ交流を」というような政府と距離を置く発想は、日本特有と言えるかもしれない。その考え方が通じる相手が中国側にいないというわけではないが、共感できてしかも実際に交流できる相手を探すのは難しい。しかも、領土問題の解決が短期間に望めないものである以上、文化交流事業について慎重に考え直す必要が出てきた。

そうした悩みを坂口英明氏に相談した。坂口氏は元『ぴあ』編集長で、北京でも同誌を立ち上げた経験があり、現代の中国映画界に詳しく人脈も豊富である。話すうちに日本側で中国映画に関係してきた人たちにインタビューするのはどうかという案が生まれた。国交回復から四〇年の間に行なわれた映画交流について、当事者たちに聞いてまとめ直してみたらどうかという案である。

そこで、元『キネマ旬報』編集長の植草信和氏にも仲間入りをお願いして、三人でインタビューの本を作ろうということになった。中国映画の本は売れない時勢がらを心配したが、中国専門書籍を手がける蒼蒼社の中村公省社長が意義を認め、ご協力を快諾してくださった。

二〇一三年二月にインタビューを開始した。インタビューは日中合作映画を連作した佐藤純彌監督、中国映画の買い付け配給に関わった鈴木一氏、中国映画字幕の翻訳の第一人者水野衛子氏、映画評論家で中華圏映画に詳しい暉峻創三氏、日中合作映画のプロデューサーの井関惺氏と牛山拓二氏にお願いした。

さらに、映画評論家の佐藤忠男氏と映画研究者の門間貴志氏に原稿をお願いした。坂口氏、植草氏、玉腰もそれぞれ原稿を担当した。

インタビューをお願いした方々と蒼蒼社の親身で献身的な協力を得て、七月初旬に『証言 日中映画興亡史』が完成した。

ただ、この本を作っている間にも、香港映画の配給をしていたプレノンアッシュ社が香港俳優が出演を拒んだため製作が滞って倒産に追い込まれるニュースが飛び込んできた。政治関係が悪化した中で映画交流を維持することの難しさは切実さを増していた。

### 4▼テーマカレッジ「新しいアジア」を味わい知ろう番外編

二〇一三年七月に『証言 日中映画興亡史』が刊行されてまもなく、早稲田大学アジア研究機構の吉岡邦子氏から、この本にまつわる講演の依頼があった。同機構が主催している「新しいアジアを味わい知ろう」



というシリーズの講演会で、この本の趣旨について話してみてもどうかというご提案であった。  
そこで、この本の中にもインタビューでご登場いた



テーマカレッジ「新しいアジア」を味わい知ろう 番外編。2013年10月28日。

のほかに、「アジアを味わい知ろう」という手段として映画が親しみやすいということ、特に現代中国社会を知るには映画がとっかかりにしやすいということ

だき、早稲田大学で教鞭をとっていらつしやる水野衛子先生にご登壇をお願いしたところ、こころよく引き受けてくださった。そして、二〇一三年一〇月に大隈記念タワー地下の講義室で「映画で中国を愛せるか」と題して、トークショーを行った。

八〇人定員の会場はほぼ満席に埋め尽くされ、盛会となった。

本の趣旨の説明に時間を割き過ぎ、水野先生にお話しいただく時間を削ってしまうという痛恨のミスをしてしまったが、水野先生からは中国映画を「窓」にして中国社会を見る見方を教えていただき、会場から集められたアンケートでも多く好評をいただいた。

会場を埋めるほどの人が集まり好評もいただけたのは、水野先生の人気

テーマカレッジ「新しいアジア」を味わい知ろう 番外編。2013年10月28日。



あろう。中国映画についての話や水野先生のトークに共感を覚えた参加者というのは、おそらく、新聞報道や教科書では知ることができない側面を映画で知ることができるといふ点にうなずかされたのではないだろうか。「映画で中国を愛せるか」どうかはともかく、「映



画でもっと中国を知ることができる」ということは会場のみなさんと共有できたと思う。

## 5▼駒澤大学 芝崎ゼミの活動

『証言 日中映画興亡史』の刊行後しばらくして、駒澤大学の芝崎厚士准教授からメールが届いた。この本を二年生のゼミのサブテキストとして使いたいので協



酒井充子監督にインタビューする駒澤大学の芝崎ゼミのみなさん。2013年12月4日。

力いただきたいという、うれしいお申し出だった。

そもそも『証言 日中映画興亡史』は日中関係の悪化を背景に、両国の映画交流の足跡をたどるという試みで作りはじめた本ではあるが、必ずしも映画ファンや中国好きの人たちだけでなく、広く国際文化交流に関心を持つ人たちが読める本になればと願っていた。とりわけ、国際文化交流に政府に関係なく民間の立場で関わっている人々がどのような思いや意図を抱いて仕事をしていて、どのような時代にどのような問題に出くわしたかということが見て取れる、ケーススタディのような本を狙って作った。芝崎ゼミは中国専門でも映画研究でもなく、その意味で、まさに筆者らの意図を読み取っていただけたことに小躍りして喜んだ。

九月に打ち合わせを始め、まず芝崎ゼミ二年生の一四名を四班に分けた。四班は『未完の対局』班、『恋する惑星』『天使の涙』班、『鬼が来た!』班、『海角七号』班とし、それぞれ作品を見て、関係者にもインタビューを試みることにした。

インタビューは佐藤純彌監督、植草信和氏、鈴木一氏、酒井充子監督にお願いした。みなさんはここよく承諾してくださり、それぞれの時代や地域ごとの事情を学生たちにやさしく語ってくださった。

学生たちは一九九〇年代以降の生まれである。一九七〇年代のパンダブームも、一九八〇年代の中国ニューウェーブの登場も、一九九〇年代のアジア映画ブームも知らなかった。映画を見て疑問を書き出し、それを手にしてインタビューに出向き、日本と中

国本土・香港・台湾との関係を熱心に聞き出していた。こうして映画を仲立ちにした世代を超えた対話が行なわれた。

一二月にクラスで四班の報告が行なわれ、この活動は無事に終えられた。学生の中には今回の勉強をきっかけに香港や台湾に行こうと思いついた方もいる。これも映画の力が取持った縁である。

### □最後に

以上が、「映画で中国を愛せるか」プロジェクトの一連の経緯である。

二〇一〇年からの三年間に、映画監督を招へいし、本を出し、トークショーを行ない、大学の教育に協力した。

その中でわかったことは、尖閣諸島問題で日本人の中国観は極度に悪化したのが、中国との交流機会を望む人がいなくなったわけではないことであった。中国側には呼びかけに答えられない事情もあって、交流がスムーズにいかないこともあった。しかし、少なくとも日本側には中国との関係構築に熱意を持つ、積極的な方々があちこちにいらつしやった。それがよくわかった。

また、映画は人々の興味を引きやすい。「映画で中国を愛せるか」と聞かれればうなずきにくいのが、報道とは異なる中国を見ることができると、少なくとも中国を知るきっかけとしてはまたとない。それも確信できた。

日本人の中国への感情は冷めてしまった。しかし、それをなんとかしたいと願っている人たちがいる。映画にはその力がある。これから映画でなにか起こることを心から願っている。